

学位論文要旨および審査要旨

氏名 須藤泰秀

学位の種類 博士（社会学）

学位授与年月日 2004年12月3日

学位論文の題名 人間化の現象学 類人猿の生命活動から人間の社会生活へ

【論文内容の要旨】

1. 本論文の狙いと性格

本論文は、副論文として提出された『エンゲルス著「サルのヒト化における労働の関与」を読む』における科学的方法と不可分な論考として性格づけられる。副論文では、エンゲルスの著作を素材として、I. 対象認識 II. 自己意識 III. 理性的認識という構成によって、科学的方法としての弁証法的論理が展開されている。大事なのは弁証法についての理解である。弁証法とは、「質量転化とか対立物の相互浸透とか否定の否定とか」といった公式、あるいは単なる認識論として理解するのではなく、〈主客同一の論理〉としての科学的方法であり、変化してやまぬ現実認識に概念的認識としての科学的方法を運用することが肝要なのである。本論文は、〈類人猿から人間へ〉という歴史的プロセスを、この分野における研究成果を弁証法的唯物論によって整理したものであるが、その性格については科学的方法の提示に加えて、この分野の統合的研究としても性格づけられる。

この分野における諸研究については、例えば類人猿から抜け出した（進化した）アウストラロピテクスの出現がここ30年ばかりの間に280万年前から500万年前とされるに至っていることに認められるように、新たな発見などによって靈長類学や人類学が飛躍的に前進している。生物学的には確定されている進化のプロセスについて、人間的・社会的レベルでどのようにトータルに捉えるかが問われる。実証主義や形式論理（悟性的認識）といった方法では果たしてトータルに捉えられるか？弁証法的論理にもとづいてこれに取り組んだのが本論文の性格でもあることを合わせて確認する必要がある。

2. 本論文の構成と要旨

構成

第1篇 類人猿からヒトへの身体進化

第1章 ヒト化における労働の意義

第1節 二度の移動様式革命 第2節 身体発達

第3節 道具製作と脳の発達 まとめ

第2篇 類人猿の種社会

第2章 類人猿の種社会の諸類型

第1節 サルの種社会研究略史 第2節 類人猿における種社会の諸類型

第3節 認識方法の批判 まとめ

第3章 類人猿における種社会の変遷

第1節 種社会変遷の弁証法 第2節 類人猿における種社会の変遷

第3節 ヒトの原型社会の特徴 まとめ

第3篇 原始社会生成史

第4章 原始社会発生期

第1節 アルディピテクス類 第2節 前期アウストラロピテクス類

第3節 後期アウストラロピテクス類 まとめ

第5章 原始社会形成期

第1節 前期ホモ・エレクトゥス類 第2節 典型的ホモ・エレクトゥス類

第3節 後期ホモ・エレクトゥス類 まとめ

第6章 原始社会発展期

第1節 ホモ・サピエンス 第2節 クロマニヨン人の世界

第3節 農業定住生活 まとめ

各篇の内容

第1篇は、エンゲルスの草稿「サルのヒト化における労働の関与」を参考にしてヒトニザルからヒトへの身体変化を説明する冒頭で、労働を現世人類の生活全体における最も基本的な条件として受け入れ、この観点から、第1に、類人猿の木登り垂直攀縫動作がヒトの先祖に地上での直立二足歩行へという大飛躍を促し、この歩行で自由になった手が石器を製作した。第2に、石器製作を皮切りとして発話能力が発生してからは、労働と発話が長大な時空で反復され、この客観的基準が類人猿に認められる脳をヒトの大きな（完全な）脳に移行させ今日に至ってきている、とする論理が展開される。このような論理展開において、エンゲルスにおいては質的規定による展開だけであったが、ここでは量的規定に関する論理展開を導きの糸として、労働の発展段階とヒトの頭脳発達の段階との関係、完成されたヒトに特徴的な前頭前野までの発達経過に言及される。ここでは、ヒト化という進化における存在論的論考として以下のように展開される。ヒトニザルからヒトへの身体的進化は、ヒトニザルに共通する側面と直立二足歩行にかかわるヒト化に固有の側面における二面的な進化と考えられるのにたいして、現世人類の直接的な先祖への進化の道は、自然的な発達という側面を全く含んでおらず、労働の結果であることを明らかにするかたちで論理展開がなされている。エンゲルスの「草稿」を発展的に継承する性格として、新たな資料を駆使しての論理的な精察がなされている。一般化して言えば、ヒトの本質は抽象的にはヒトに内在している労働力の現出結果である労働であるが、現実的本質としては「利益社会」的諸関係のアンサンブルであり、「利益社会」は労働にその本質をおく、ということが表明されている。したがってヒト化という問題については、労働の意義を考察するだけではなく、ヒトの遠い祖先の「社会」＝「群」と生物の「種社会」（＝動物の群）との違いを明らかにし、さらには労働に本質を持つヒトの原始社会生成史を考察することこそが総体的に理解する科学的方法である、という基本的思惟が示される。

第2篇は、ヒトニザルからヒトへ進化しつつあったわれわれの遠い祖先の「社会」のようなもの（＝原始人群）、これのあり方についても〈第1篇〉と同様の観点から、類人猿どものいわゆる「種社会」との違いについて詳細な考察がなされる。すなわち、科学的方法の具体的展開として「生成史」への展開である。はじめに類人猿における「種社会」の類型についてまとめ、次いで類人猿における「種社会」の変遷

についての整理がなされる。そのような展開によって、チンパンジー属的な群れへの「動物家族」の埋没つまり父系的乱婚群と大脳という内的可変性という考察にもとづいて、原始社会生成史を考える科学的方法が明確に示される。具体的には、チンパンジー、ボノボ、ゴリラなどの類人猿の個体間の関係および群のあり方をこれまでの個々バラバラな研究諸成果について体系的に整理することを意味するのであり、そのことによってヒトの「原型社会」への進展を科学的に把握する道が開かれることが主張される。

第3篇は、以上のような類人猿の「種社会」研究を軸としての原始社会生成史を発生史、形成史、発展史という順序で、ヒトの原型であるアウディピテクスあるいはアウストラロピテクス類の営んだ生活からはじまって科学的方法によって展開される。

最初はチンパンジー属が構成しているような父系的乱婚群から発すると推論される。具体的にはヒトの遠い祖先の群では、男は複数の女と、女も複数の男と媾合しており、したがってその群れのなかの子どもたちはそこの成人たちすべての「共有」的存在である、といった様相であった。このような様相が、最終的には瓦解してペア型夫婦だけが残るようになること、すなわち、もともとは普遍的に行き渡っていた「共有的」な男女の絆に包摶される範囲が徐々に狭まっていき、やがては現在主として行われている個別婚=一夫一婦婚へと経過していくことを具体的な資料によって論証するという展開になっている。

アウストラロピテクス、ホモ・エレクトゥス、ホモ・サピエンスへと生成・形成について、科学的方法の展開によって「原始共生社会」の生誕と性格が人間（化）の本質的把握として示される。すなわち、抽象的本質としての労働と現実的本質としての社会的諸関係の発達の結果であり、目的意識性という人間的特質も同様に性格づけられる。なお、農業定住社会への過程についての叙述においては、人間家族の発生、先史美術の位置づけ、宗教の発生などについても新たな解明がなされている。

ホモ・サピエンスは生活手段を制作して生活する存在であり、自然にそのまま規定されないで済む無限の可能性を有する唯一の存在である。つまり、目的意識性によって未来を切り開く存在にほかならない。そのような無限の可能性という観点から人類進化について考えると、アウストラロピテクス、ホモ・エレクトゥスは可能性を前進させるが、生産力の発展と群のあり方とりわけ雌雄の関係においては限界があったことが、豊富な資料によって展開されている。我々現世人を含むホモ・サピエンスは、意識の発生・発展とともに目的意識性をより鋭くしていくことによって、自然のコントロールだけにとどまらず、社会のコントロールも可能な存在であるが、そのような本質的把握の方法にもとづいて、原始社会から階級社会への転化以降はその可能性が「利益社会」に傾斜しているというような指摘も含めて、未来への展望なども示唆されている。

【論文審査の結果要旨】

社会科学における諸研究においては、古典を含む人類の知的遺産が科学的方法をわがものとする宝庫であるにもかかわらず、そのような知的遺産を考慮することなく、いたずらに現象的変化と数字データを追いかけるという現在の支配的傾向が顕著である研究状況のもとで、科学的方法を抽象論としてではなく、豊富な事実資料に依拠して展開をするという学問の王道を進むという博士学位にふさわしい高い水準の論述であることをまずは基本的に確認できる。具体的には、3つの独創性を評価することができる。靈長類学、人類学、哲学、その他の諸科学の統合のあり方を科学的方法にもとづいて具体的に示したことである。このことは、学際的研究が呼ばれているこんにち、異なる学問分野の単なる寄せ集めでない共同研究のあり方を示していることを意味する。次に靈長類学という筆者の専門とは異なる専門分野についての精察・

整理は靈長類学の観点からも高く評価できるものであり、上記のことを可能にする研究の積み上げによるものにほかならない。第三に、すぐれた古典をわがものにすることはいかなることかということを、「人間化」という具体的な素材によって示したことである。研究において「古典から学ぶ」ということがしばしば言われることであるが、この「学ぶ」ことは古典の解釈や説明をするだけでは「知る」という段階にとどまるものである。この意味において、「古典を学ぶ」つまりわがものとするとはいかなることが示されていることに加えて、古典における思惟・方法を発展させることにまで踏み込んでいることは、筆者の長年の研究の結果として高く評価することができる。

公聴会においては、靈長類学からの質疑、人間発達の観点からの質疑、方法論についての質疑などがなされたが、適切に応えられるにとどまらず、さらに教えられることが多いかったことは、筆者の豊かな学識を示すものであることを付け加えておきたい。最後に今後の期待を込めた若干の課題について簡単に触れておこう。本論文は人類社会生誕のプロセスという500万年以前からの論述であるが、公聴会において述べられた新たな構想がエンゲルスの「空想より科学へ」における科学的方法との関連で、現在のヒトが「悪魔」的存在に傾斜している「利益社会」批判に結びつけて、須藤氏の研究が新たな展開にもとづく未来への展望の提示へと進むことを今後の課題として期待したい。

以上のような評価により、本論文が独創性に富んだ高い水準にある事を確認し、学位授与に値すると判断する。

【試験または学力確認の結果の要旨】

本論文提出者のこれまでの研究業績を考慮すると、語学力等についてはあらためて試すまでもなく十分に示されていると判断し、本学学位規程第25条第1項により、筆記試験等による学力確認を免除した。

以上の諸点を総合して、本論文提出者に対して本学学位規程第18条第2項により、博士（社会学 立命館大学）の学位を授与することを適當と認めるものである。

審査委員	(主査) 飯田 哲也 立命館大学産業社会学部 教授
	(副査) 荒木 穂積 立命館大学産業社会学部 教授
	(副査) 木田 融男 立命館大学産業社会学部 教授
	(副査) 加納 隆至 京都大学名誉教授（前京都大学 精長類研究所社会構造分野教授）